

想うに昔深い泥濘と戦っていたのを思い出した。それは他人には取るに足らないことであるし、僕にとっては今思い出しても気分が悪くなるようなものだった。それは一人息子として育ったからかもしれないし、幼馴染がみな年上だったからかもしれない。考えてみると幼い頃、まだ小学生にも満たない歳だったころは、幼馴染の輪が人生の全てだった。一番の年下の自分はいつても、自分よりも背も高く脚が速く賢い幼馴染たちと遊びながら戦っていた。戦っていたと言っても特別不条理に暴力を振るわれるようなことはなかった。みな普通の子供だった。でも気に食わないことがあると僕は正々堂々とぶつかり、声を荒げて手を挙げ、そしていつもボコボコにされた。何が気に食わなかったのかは今となっては欠片も思い出せないけれど、歯向かうことに生きがいを感じていたのかもしれない。子供とはそういうものではないかと、大人になった今幼い子供のケンカをみてそう思う。それでも次の日には何もなかったようにまた遊び、時々また戦った。それは兄弟喧嘩に等しかったのかもしれない。僕は確実に兄弟を欲していた、幼馴染ではなく血の繋がった自分に似た人物を。僕は自分に兄弟がいないことを時々不思議に思った。時々子供がどのようなしただけなのか、自分に兄弟ができる可能性を方法を心の中で考えることがあった。まだどうしたら子供ができるなんて知らなかったから、当然ながらまず何をどう調べたらいいか、誰に聞いたらいいかもわからなかった。僕は自分の中でそのことを思うとき、ただ反芻するしかなかった。ただの不思議だ。でもその不思議を両親に聞くことはなかったように思う。聞いても無駄なような気がしたし、何か都合が悪いような気が、幼いながらしていた。中学生くらいになって、僕もある程度性についての知識をえるようになったとき、母が僕が自分に兄弟が

いないことを不思議だと思っていたのを知っていたかのように、そのことを突然話してくれた。いや、もしかしたら僕が尋ねたのかもしれない。記憶が曖昧だ。でも母がその理由を話してくれた、時を待っていたかのように感じた。小学生になって家で一人でいる時、見慣れないアルバムが目にとまった。暗い赤色のカバーをした、いかにも古いアルバムが今までこの家にあることを僕は知らなかった。そこには若かりし頃の両親の写真がたくさんあった。二人で旅行に行った時の写真が多かったが、とても楽しそうなものが多かった。不機嫌そうな写真は一枚もなかった。幸せに満ち溢れていた。母親のビキニ姿や父親のパンチパーマは見ていて時代を感じた。初めて客観的に家族を感じた。血の繋がりを。僕は確かにこの二人の息子なのだ、改めて思い知らされた。たぶん嬉しかったんだと思う、高校生くらいになったある日ぼくはおもむろにその中の一枚を取り出し絵にしたことがある。タイマーで撮影されたであろうその写真の二人は、恋人同士もしくは夫婦であることを誇っているかのように前のめりになり、肩を抱き合いながらポーズを決めていた。元々は他人であるのに、男同士でも女同士でもないのに友情のようなものをその写真から感じた。またある不思議が思い浮び、しばらく頭を離れなかった。自分にもこれからの人生でこんなにも分かり合えて、幸せを分かち合える人と出会えるような人に出会える自信はなかった。もうそのことには兄弟がいないことをそれほど気にかけてなくなっていた。それよりも普段の学校生活やサッカークラブのことで頭がいっぱいだった。小学校一・二年性くらいときだっただろうか、未来の自分の夢を見た。自分が通っている小学校の体育館の二階（体育館を囲むように細くなつた柵がたてられた道みたいなもの）とその踊り場みたいなもの、正式名称

はわからない)で、下では恒例のご近所バザーが行われている。僕は僕にそっくりな顔をした子供をあやしている。歩き始めたばかりであろう息子がヨチヨチを自分の方によってくる。僕の名前を呼ぶ女性の声があった。声があった方を子供を抱えながら向くと、日が差し込む南向きの正方形の大きな窓を背に女性がこちらを向いている(と思う)。逆光で顔はわからない。でも僕の妻であることは間違いないようだ。目が覚めてもその夢はかきかされるようなことはなかった。今でもこうして書き起こせるくらいなのだから、ある種のデフォルメはされていたとしても、鮮明であつた。しばらくして僕のことを好きだという女の子が現れるようになった。小学生の男の子なんて恋愛に対してまだ何も判断基準がないし、好きだと言われてもどうしていいかもわからないし、付き合うということも実態がなさすぎて何のことだかわからない。僕も御多分に漏れずそうであつた。単純にうつとおしかった。邪魔だつた。男友達と遊んでいるところにもコノコと三四人でやってきては僕を呼び出す。無視していると割って入ってくる。大声で話しかけてくるし、それを無視する僕を見て一緒に遊んでいた男友達は完全に冷めきっている。不機嫌そうな顔で「行ってやれよ」と言われ、よくわからないような場所に連れて行かれ、その中の一人を置いて他の女の子たちはそそくさといなくなる。遠くの、それでも表情や声がわかるくらいの都合がいい距離をとって、影に隠れてこちらの様子をうかがっている。僕とその子には沈黙が続く。僕は耐え切れなかった。だって早く戻ってまたみなとサッカーがしたかったから。でも何か言い出すまではそこにいなくちゃいけないような気がしてそこに止まっているだけだつた。やがて女の子が口を開く、ませた口のきき方で毎度同じことをいう。僕になにを望んでいるんだ！何をし

ろっていうんだ！またなぜだか泣きだし、僕の元を去っていく。影に隠れていた女の子たちの元にその子が走る。その輪の中からよく話がたち、堂々とした女の子が僕の方に駆け寄ってきて口を開く。なんであの子の気持ちかわかってあげないのと。僕は学校に行くのが憂鬱になった。毎日ではないけれど、一週間に一度はこんなにも無駄な出来事が起こる。ある時は僕に何度も告白してきた子の輪の中の別な子が僕のことを好きだという。実は私も好きだったんだ、あの子があんたのこと好きだったというから言い出せなかったけれど。いい加減にしてほしかった。僕は女の人が嫌いになった。それと同時にまだ恋愛のレの字もわからなかった自分がある種冷静に女の子を見定めているのに気付いた。僕は夢で見た未来の妻の面影をおぼろげながら、でもはつきりと覚えていた。あの方が僕の運命の人ならば、君たちはあの人とは全然違う人だ。だからダメなんだ、君たちの期待には答えられないんだと。一遍正直に伝えてあげようかと思つた。コレコレこういうわけでダメなんです、ごめんなさいと。中学生になり、みなが性に目覚めると、異性の話で盛り上がるようになった。おまえは誰が好きなんだよと、俺はあの子が好きでさー、おまえ仲良いだろちよつと話してきてくれよ。僕は一度だけ同じサッカー部の友達が好きだといった子に告白する手伝いをしたことがある。奇しくも自分が忌み嫌っていた、友達を自分が呼び出した子の元に津れていき影で出来事を確認するあれを！次の日上手く行ったよ、俺たち付き合うことになったんだ、ありがとうと礼をいわれた。どうでもよかった。とても嬉しそうな顔をしていたのに、僕の気は全く触れなかった。彼女になった子はクラスメイトだったので、そう聞いた後なんとなく話しかけた。よかったねと思ってもいない言葉で話しかけた。微妙な表情をし

ていた、彼氏ができたのに！なんか私のことすごく好きだったって一生懸命いうもんだからいいかなって。そんなもんなのか、恋愛とはそんな気軽なもんなのかと衝撃だった。僕はまだ一度も彼女をできたことがなかったから、恋愛を神格化していたのかもしれない。なーんだ、そんな感じでいいもんなのかと、肩の力が抜けたようだった。恋愛を侮蔑するようになった。△はその子と結びつけた出来事から急に仲良くなつて、よく家に遊びに来るようになった。この間△とどこどこ行ってさー、手つないだんだー。キスしたいんだけど、どうしたらいいかなー。サッカーの話なんか一切せずに、色ボケした△はバカみたいに女の子の話しかしなくなった。つまらなかつた。ある時家にある一枚のCDのジャケットをみて、音楽の先生にボーカルの人が似てる。貸して欲しいと△が言い出した。音楽の先生は三十代半ばの音大を出た、気丈で美しい先生だ。彼女は僕の担任だった。別に貸してもよかつたのだけでけれど、理由を知りたくなつた。だって聴きもしないのに貸してなんておかしいような気がしたから、ただそれだけの理由だった。しばらく黙つた後、恥ずかしそうな顔でぽつぽつと聞いた。俺この人で抜いてみたいんだ。オナニーしたいんだよ。僕のCDをエロ本代りにしたいという事実少し驚いた。こいつは本当にぼけてるな、だからあんなにも小学生の時はキーパーとして優秀で県の選抜にも選ばれるくらい背が高く将来を期待されていたのに、ただの弱小中学のキーパーに成り下がっちゃんだよ。アホ！アホ！昔敵チーム同士で対戦した時のおまえは、とてつもなく厚い壁だった。常食軍団のスーパーキーパー、打ったシュートを何度でも跳ね返し、僕らの優勝を何度も阻み、自分のチームに安定感と大勝をいつももたらしていた、あの憧れの選手が一年やちよつとでこんなにもただのバカ

になるなんて。いじわるとしたくなかった。ㄨ、それは今とつても気に入って、最近買ってもらったばかりだし、貸せない。オナニーしたいだけなら、歌詞カードだけでも貸してくれよ。ダメだ、歌詞も今覚えてるんだ、難しいからみながらじゃないとダメなんだ。そうだ、今ここでオナニーしろよ。今ならいいよ貸してやるよ、ただここでだ。別の部屋はダメだ俺の部屋じゃない。入ったら怒られる、ここでならいいよ、やれよ！ㄨは一瞬とまどったような顔をしたが、ズボンを下ろしてことを始めた。僕は他人のオナニーを初めて見た。くっさいどうしようもない抑えきれない欲望を抱えた塊を僕は最後になるまで見ていた。バカが本当にバカになっていく様子は面白く感じられた。ㄨはしばらくバツが悪そうにした後、慌てて笑顔をつくり、内緒だぞと言った。おまえに言われたからしたんだ、だから内緒にしてほしいと。たぶん次の日僕は僕がつなげてしまったㄨの彼女に告げ口をした。俺の目の前であいつは先生に似ているとってCDジャケットを見ながらオナニーしたと。別に別れさせたかったとかではなかったと思う。でも少なくとも僕が好きだった憧れていたㄨとは全く変わってしまった今、彼女にそれを伝えなければならぬと思った。ごめんね、俺あいついいやつだと思ってたんだけど、ただのアホだった。好きなら別にいいけど、俺が繋げたいみたいになってるし、一応。もう俺が君に紹介した頃の、俺の好きなあいつじゃないよということだけは言わせて。しばらくしてㄨと彼女は別れた。中学ならよくあるように、くっついたり離れたりするよなただの別れだった。僕はㄨと話さなくなった、ㄨも僕に話しかけてこようとはしなくなかった。女の人が僕らの友情を壊したのだと、壊したのは恐らく自分であるのにそう強く思った。そしてまた女の人が嫌いになった。女が絡むとろくなこ

とがない。その頃、僕は剣道部のある女の子に五回、一週間おきに告白された。かわいくなかった、全然タイプでもなかった。彼女の熱心さには頭が上がりないけれど、でもそれよりも僕は君が五回もその小さな体に秘めている勇気を絞り出して好きだと告げるほど魅力的な人間ではないと自分で思うようになった。4回目くらいの時に、試しに聞いてみた。何度もありがとう、でもやっぱ君の期待には答えられないけれど、聞きたいことが一つある。君は僕とそこまで話もしていないし、クラスも別だ。そうだよ、僕が君のことをよく知らないように君も僕のことをよく知らないはずだ。でも好きだという、言ってくれるね。それは凄くありがたいと思うよ（たぶん思ってたなかった。その場しのぎで出た言葉だ）。じゃあどこが好きなのか教えてくれないか、出来るだけ具体的に。彼女は口ごもった。その後なんか容姿のことだとか、優しいとか当たり障りないことを言った気がする。優しいだって、俺が！を目の前で辱めて、そのことを告げ口した薄情なおれが！その後をの元彼女が僕に告白してきた、実はと付き合う前から好きだったと。その日僕は言いようもない寒気がした。また事がややこしくなった。

卒業間近になって、学校で盗撮事件が起きた。女の子の体が俄かに女性へと変わる中学校では、女の子は更衣室を使い着替える。さすがに男の子も一緒に教室で着替えるのはこちらとしても気がはばかられるし、その方が安心だった。そこに盗撮器を仕掛けたやつがいるという。主犯はだった。彼はいかにも気が大きくて力持ちという昔ながらの体の大きな男だった。放送部に三年間在籍し、クラス中では目立たなかったがいつも笑っていて誰も彼を嫌うような人間はいなかったと思う。僕もが詳しいアニメや機械の話面白がって聞くことがたまに

あった。彼の家は帰り道だったし、時々一緒に帰ったこともあったと思う。そこまで仲が良かったわけでもないが、彼の家の前で待ち一度DとDなんかを借りたことがあったと思う。人間誰にでも善と悪が混在することはその頃には僕もわかっていたが、彼は善意の方が悪よりもまさっているような人間のような気がしていた。でもDもDのように性に狂っていた。まずはDとOとあと誰か、仮にAとしておこう。それら三人をCは支配下に置いていた。それも性による支配だった。C率いる四人組はみな消して目立つような人間ではなかった。そしてみな放送部に所属していた。彼らは校内の広報といって校内新聞を作る名目で、放送部の機材を私物化していた。彼らはいつもカメラをぶらさげ、クラスメートを、部活動を、校内の出来事を記録していた。彼らはカメラを向けることで普段コミュニケーションを取れない相手とも対等に渡り合えることに喜びを覚えていたのかもしれない。警察からの報告を受け、先生が各クラスの学級委員だけにこの事実を説明した。僕は自分のクラスの代表としてそのことを聞くことになった。こと真相は闇が深かった。まずこの計画を思いつく前、彼らは放送部という特権で撮影しまくった写真をアイコンラに使っていた。Cはパソコンにも長け、自らアダルト画像とクラスメートを合成した写真をDとOとAに見せたことがあった。彼らはさぞ驚いたことだろう、あの善意の塊のようなCがこんな下衆なことを。しかしCは驚く彼らにたぶんこんなことでも言ったのだらう。おまえたちが好きな、心の奥底で求めているけれど決して実現することなどない、愛しの高嶺の花が俺によって裸になる。裸がみたかったら俺の言う通りにしろと。手始めにCは協力者への褒美として、三人がそれぞれ心のなかで思っている女の子のアイコンラを三人それぞれにあげた。それで契約が成立し



た。それから彼らは校内で商売をするようになった。気が弱い、「一日で一言も話さないような男の子をひっそりと、一人ずつ丁寧に自分たちの泥に浸からせていった。話しかけられないような子は当然友達も少ないし、仲良しグループなんてものにも属してないことが多い。その弱みに付け込んで、笑顔で話しかけ、巧みにそいつの好きな人を聞き出し、アイコラを与えた。最初はタダで与えていたが、次からはお金をせびるようになった。1000円が千円になり、多い時では一万円にまでにアイコラの値段を吊り上げた。声をかけられた子の中には次第にエスカレートしていく要求に拒絶反応を起こすものもいた。無理だ、払えない。もう俺に話しかけないでくれと。それでもその時には遅かった、多くの子たちは自分たちの声を上げるのに長けていなかったし、おまえがアイコラ写真持つてるのをばらすぞを脅され、払えないなら協力しろと言われた。そうして彼らは少しずつ、でもひっそりと勢力を拡大していった。彼らにはお金が必要だった、盗撮ができる小型の精密なカメラを買うために。彼らはもう合成では満足しなくなっていた。本物の裸がみたい、その性の衝動だけが彼らを盗撮へを動かした。そしてことが行われた。彼らはことあるごとにカメラを仕掛け、着替えが撮影されると見張りを立て、それを回収した。事件が発覚したのは、内部分裂が原因だった。繰り返し回収される盗撮映像を〇と最初の三人は一人締めし、他の会員が見たいというのを要求した。もっと高性能な、もっと精密な機械がほしい。彼らは〇に洗脳されていた。また〇も性に洗脳されていた。良心の呵責とお金を払えないメンバーが結託して、警察に通報した。朝僕が登校すると複数パトカーが学校を囲んでいた。すぐに全国集会が行われ、〇たちはパトカーに乗せられ、警察署に連れていかれた。逮捕された四人はそれから一

度も学校にこなかった。2ヶ月後何事もなかったように卒業式が行われ、僕はこの街を出た。

多くの人が青春時代を振り会える時に爽やかな思い出として語る恋愛は、僕を悩ませてやまなかった。果たしてあの夢で見た未来の妻に本当に果たして出会えるのだろうか。兄弟がいたら相談する事ができたのに。ああ、なぜ僕には兄弟がいないんだ。血の繋がった、変わることものない信頼関係のもとにある僕の分身が！なぜ！その頃また急に兄弟がいない自分を呪った。十五歳の時の僕は泥濘にいた。